

海と生きる 2

—水産業のイメージアップと気仙沼観光の一歩を追う

1850年創業、老舗漁具屋七代目の帰郷

震災をきっかけに気仙沼へ戻つてくる人もいる。彼らには、「傷ついた故郷の復興に携わりたい」という思いがある。江戸時代から漁業資材販売を続いているアサヤの廣野一誠専務も、その一人だ。

アサヤでは、気仙沼本社を含む4つの営業拠点(宮古、釜石、石巻が、震災によつて全壊した。亡くなつた社員もいる。しかし、漁業の再開のためには、漁具の供給は不可欠だつた。取引先や金融機関との折衝、煩雑な補助事業の事務処理に追われるなか、プレハブの事務所で、通常の何倍もの物量をさばいた。廣野専務は、東京の大学を卒業した後、IT系企業などで働いていた。すぐには気仙沼に戻ることができなかつたが、震災から2年後に一時帰省した際、復旧しつつある会社と故郷の姿を見て、「最も大変な時に、ここに

いなかつた」と悔やんだ。家族とともに帰郷については素人同然である。そこでは、社員とともに現場を回つた。現場でじかに触れる漁業の世界、漁具の知識は、どれも新鮮で興味深いものだつた。この経験は後に、気仙沼の復興・創生に向けた重要な視点となる。企業に携わつていくなが、東北未来創造イニシアティブの協力による人材育成道場「経営未だ塾」(本紙9月号60頁参照)で学んだことも、1つの転機になつた。監査法人・企業から派遣された一流のメンターたちと一緒に自社の事業計画を作成した。時に厳しい意見をぶつけられ、「本当にやりたいこと・やるべきことは何か」を自問自答し続けるなかで、「海とともに生きる三陸の漁業に貢献したい」という気持ちが根幹にあることに気付いた。経営者として腹が据わつたのはその時である。

復興・創生に向け、水産業を観光コンテンツとしてプロデュース

水産業と観光を融合し、気仙沼だけの「オンライン・コンテンツ」の開発を目指す、「観光チム氣仙沼」も立ち上がりつた。廣野専務も経営未だ塾の修了生たちとともに参加する。

「魚はこうやって獲るのか、牡蠣はこうやって育てるのか、と漁業の面白さに気付いた。奥が深い気仙沼を味わつてもらうには、水産業の現



「しごと場・あそび場 ちょいのぞき」で漁具に触れる

提供:アサヤ

(注1)東北未来創造イニシアティブ:大滝精一東北大学教授、大山健太郎アイリスオーヤマ会長を発起人として発足



カツオの箱詰め

日本中の人々に食べてもらいたい 気仙沼のおいしい魚を

7月の気仙沼魚市場は、カツオの水揚げで

場を体験してもらつたのが一番(廣野専務)。2015年には、「JTB地恵(ちえ)の旅・気仙沼」が企画された。観光チーム気仙沼とJTBグループのコラボレーションによつて生まれた観光商品だ(本誌2月号26頁参照)。学校・企業向けのプログラムで、魚市場を取り巻く仕事を実体験し、獲れたてのカツオなどの海の幸も堪能できる。好評を博し、今年も問い合わせが来ている。個人旅行者向けのプログラムとして、「しごと場・あそび場 ちょいのぞき」も立ち上げた。アサヤは「漁具屋潜入」と題して、漁業者の知恵と工夫が溢れるさまざまな道具に触れてもらつミニツアーリーを提供している。

活気づいていた。漁船からベルトコンベアで次々に運ばれてくるカツオを、1本ずつ丁寧に箱詰めしていく。岡本製氷の岡本貴之専務は、トラックに満載した氷を、スコップで手際よく箱に注ぎ込んでいた。「氷屋が箱詰めまで行うのは、気仙沼独特のやり方」だという。

「氷屋は、いわば裏方の仕事。でも、気仙沼のおいしい魚を日本中の人に食べてもらうには、氷は欠かせない。そこがモチベーションになつていて」と岡本専務は製氷業の魅力を語る。

漁港周辺に立地する製氷業者は、津波によつて壊滅的な被害を受けたものの、岡本製氷の冷凍機は奇跡的に難を逃れた。市場は2011年6月に水揚げ再開を決める。鮮魚を出荷するには氷は不可欠となる。何とか氷と電気を確保し、岡本製氷の冷凍機と社員たちはフル稼働する。「やるしかない」という気持ちだった。

それでも売り上げは、震災前の6割程度。

現在も、7~8割程度までしか回復していない。

氷屋、箱屋といった業種の売り上げは、

収益を確保できるビジネスモデルにシフトしていきたい。岡本専務が「観光チーム気仙沼」に参加した理由の一つには、そうした経営判断があつた。

「水の水族館」の再開を目指して

岡本製氷が「しごと場・あそび場 ちょいのぞき」で提供する「氷屋探検」は、子どもも

岡本製氷は「水の水族館」の年内再開を目指す。実現すれば、気仙沼観光の目玉になり、水産業のイメージアップにもつながる。アサヤの廣野専務とは小学校の同級生である。ともに東京での生活を経験し、あらためて気仙沼の良さを実感した。故郷の復興に懸ける思いは熱い。

(総務本部・広報本部)

(注2)観光チーム気仙沼:一般社団法人リニアス観光創造プラットフォームを母体とする
(注3)気仙沼漁港のカツオ水揚げ量は、19年連続日本一